



ドキッとした。私も、家の近くにアル中やヤク中の病院ができれば嫌だと内心思ったからだ。大丈夫かな、顔に出てなかったかな。

「依存症本人はもちろん、その家族も苦しんでいるの。何十年もかかる長い戦い。誰だって依存症になる可能性はある。自分の家族がそうなったときに病院がなかったら困りますよね、って何度も言っているの。いつまでも自分が安全圏にいられる保証はないのよ」

頭をガツーンと殴られたようなショックを受けた。依存症になるのは、そんな悪いことに手を出した本人のせい。罰を受けるのは当然で、自己責任だと思っていた。でも、そういう人にも家族がいるんだ。依存症患者の家族の気持ちなんて、考えたこともなかった。私って、もしかして、ものすごく冷たい人間なんじゃないだろうか。

「患者さんも依存症から抜け出そうと必死で努力しているの。…あ、ごはん前にごめんね。さあ、ギョウザ食べよう」

恒例のギョウザパーティーが始まったけれど、私は全然楽しめなかった。自分の浅はかさをつきつけられたような気がしたからだ。

一つは、依存症患者への偏見だ。実態を知りもせず、ネットの話や勝手なイメージで、怖い人、ダメな人と決めつけていた。自分にはネットリテラシーがあり、情報に振り回されていないつもりだったが、全然そんなことはなかったのだ。

もう一つは、依存症家族のことだ。もし私が依存症になったら父は悲しむだろう。それ以外にも、私の身近な人が依存症になる可能性だってあるのだ。そのとき私は無関係ではなく、依存症家族という当事者になる。家族の依存症を治したいのに病院がなかったら…。家族は、入院先がないことだけでなく、周囲の偏見や先の見えなさなど、たくさんの苦しみがあるのだ。

私は、いじめや差別がいけないことだと当然知っているし、そんなことはしない自負があった。しかし、優等生の自分の中にも、人を差別する心があったのだ。自分に都合のいい面しか見ないで、弱い立場の人のことを知ろうともしていなかった。そういう自分の卑怯さを痛感して打ちのめされた。しかし、これは必要な経験だったと思う。差別というのは、しようと思ってするわけではないのかもしれない。本人にそのつもりがなくても、いつのまにか差別をしてしまうことがありうる。そして、自覚がないだけに余計たちが悪い。だからこそ、誰しも、自分が無自覚に差別をしようとする可能性があることを知ることが必要だ。そうすれば、人を傷つけるふるまいを減らせるだろう。「絶対になくせる」と言うのは難しい。こんな立派そうなことを書いている自分だって、まだ無自覚な別の偏見を持っているかもしれないからだ。自分の醜さに気付いた夏を私はきっと忘れないだろう。